# アマガミ　γの雑貨屋

アンリ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
アマガミ　γの雑貨屋

【Ｎコード】
Ｎ１８８２Ｑ

【作者名】
アンリ

【あらすじ】
アンリこと駄作家が書く「アマガミ　αの作る結末」「アマガミβの見つけた景色」のＩＦストーリーを掲載していく場として設けました。
またばかばかしい話ばかりをこちらにアップしていこうかと思っています。（しかも不定期）
ですのであまりそういうのが好みでない方は、唾を吐き捨てて去っ

ていくことをお勧めいたします。

こちらに掲載するものは上記の２つとは繋がっていないものとして見ていただけると幸いです。

## その１（前書き）

「その５」までは前回投稿していた番外編と内容は変わりません

## その1

「プールサイドで走らないでくださいね～！」

今日もバイトに勤しむ俺、巽怜（１７）。

輝日東高校２年…いやあと１ヶ月もすれば３年生になる。

そんな俺はこの頃定期的に任せられるようになった水泳スクールの指導に当たっていた。

やはり最高学年に上がると言うこともあり、俺にもようやく威厳というやつが付いたのだろう。

じゃなきゃ子供とはいえ、大事なお客様を一端のバイトになんか任せるはず…

「うわっ！たつみせんせ～こわ～い！」

「きっと彼女ににげられたからイライラしてるんだぜ～！」

「はい、そこの２人。罰としてバタフライ３００追加な。」

「「や～だよ！べ～！」」

…

バシャバシャと反対側のプールサイドへと泳いでいくガキ２人。

「あ～、まて～！」「わたしも～！」「おれも～！」
それを合図に集まっていたガキ共が一斉にプールの至る所に散らばっていく。
「……はぁ…お前ら待て～～！！他のお客さんに迷惑だろうが～～！！」
周りに誰もいなくなり、本日の営業は終了…なんてことはいかず、むしろこのままではバイト代すら出るか怪しい。
しょうがないので全力で追いかけて、1人1人捕まえていくしかないな。
「おっし、捕まえたぞ、祐介。」
「はなせよ～！たつみ～！」
「…あんまり暴れるとお母さんにチクるぞ…」
「っ！…わかったよ～。」
「よし、それじゃあクロール4、平4、背泳ぎ4やったら休憩な。」
「は～い…」
トボトボと練習用レーンまで泳いでいくガキ。
これでようやく3人か…

「はぁ…練習時間無くなっちまうよ…」

そうなったらバイト代が…

今月…いや年明けからやたら七咲が色んな場所に連れ回したから、ずっと金欠状態が続いている。

新年早々その七咲に告白されてからというものの、七咲の積極性に振り回されっぱなしで、平日休日問わず俺のバイトと七咲の部活が無い日には殆ど外出するようになった。

そりゃ金欠にもなるもんだ。

それでも七咲の弁当のおかげで、極貧生活による栄養失調の心配はなさそうだった。

…よくよく考えたらなんか落ち込むな。

一時子ども達を追いかけ回すのを止め、プールサイドに手をかける。

「なんか上手くコントロールされてるよな〜…」

「子供にも振り回されるなんて、先輩は本当に高校生なんですか？」

「はっ？」

頭上から不意に声をかけられ、間抜けな声を上げながら頭上を向く。

「まぁそれでこそ先輩だと思いますけどね。」

「七咲、それは言い過ぎじゃない？」

「な、七咲！？それに塚原先輩まで！？」

「くすっ、先輩。お久しぶりです。」

「久しぶりね、巽君。」

そこにはクールで面倒見の良い競泳水着姿の先輩後輩が並んで立っていた。

「お久しぶりです、塚原先輩。それと3日ぶりだな、七咲。」

「はい、久しぶりですね。」

「ウワーヒサシブリダナー。…それで塚原先輩と七咲は今日泳ぎに来たんですよね。」

当たり前の質問だが、とりあえず話を繋げるために聞いておく。

「そうね。私が『受験勉強で全然泳げなかった』って言ったら、七咲が『じゃあ一緒に泳ぎに行きませんか？』って誘ってくれたからね。…でも本当の目的は別にあったみたいね。」

「ち、違いますよ、先輩！私は塚原先輩と泳ぎたくて誘っただけで…」

おっ、七咲が顔を真っ赤にして狼狽えてるぞ。

最近じゃ尻に敷かれまくってたから、こういう七咲は意外と新鮮だ。

「あらっ？私はまだ別の意味、について説明してないわよ。七咲は何を思ってそういう答えを返したのかな？」

「うっ…先輩、ヒドいです。」

「くすっ、ごめんなさい。七咲と会うのも久しぶりだったから、つい苛めちゃった。」

「あっ、そうなんですか。てっきりしょっちゅう会ってるのかと…」

先輩が卒業するまでには、よくツーショット…ないしはるか先輩含めたスリーショットを見ていたし、結構意外だ。

「あれっ？でも先輩とは先週…」

「そうね。実に6日ぶりね。七咲の感覚からしたら『久しぶり』でいいのよね？」

「うっ…」

「ははははっ！七咲もやっぱり塚原先輩の前じゃ形無しだな！」

借りてきた猫みたいな態度になる七咲。

…前も思ったけど、やっぱり塚原先輩の前で七咲に会うようにしたいな。…偶に、でいいけど。

「というか先輩。受験勉強って…たしか推薦で国立の医大貰ってませんでしたっけ？」

「あぁ…それははるかの受験勉強に手伝ってたから。はるかったら当日までずっと私に頼りっきりだったから…」

「なるほど。はるか先輩ならあり得そうなことですよね。」

つい映像が頭の中に浮かんで笑ってしまった。

はるか先輩にはかなり失礼だな。

「それで…巽君。後ろで生徒達が待ってるわよ。」

「えっ？」

振り返るとそこには水面から顔を半分出して、こちらの会話に聞き耳立てるスクール生の塊が出来ていた。

「せんせ～！」

そちらを見ると元気良く手を挙げる生徒が1人。

「ん？どうぞ、宗太君。」

「どっちがせんせ～のほんめいなの～？」

「最近の小学校は何を教えてるんだ！？」ビチャン！

昨今の教育に怒りをぶつけながら、手のひらを水面にぶつける。

「わ～！たつみせんせ～がおこった～！」

「にっげろ～！」

せっかく集まったのにまたも逃げていくガキ共。

このままでは本当にバイト代が危ういぞ…

よし…こうなったら！

「はい、ちゅ～も～く！」

パンパンと手をたたきながら大声を出す。

狙い通りスクール生は足を止める。

「この2人は今日お前らの先生だぞ～！はい、挨拶する！」

「はい？」

「…いつの間にそういうことになったのかな？」

「…すいません。ちょっと話合わせてください…」

察してください…と軽く頭を下げながら話を続ける。

「こちらが先生にとって先輩の塚原先生、こっちが後輩の七咲先生な。はい、挨拶する！」

「「「おねがいしま～す！！つかはらせんせ～にななさきせんせ～！！」」」

「あっ…えっと…」

大声で挨拶する生徒達に、七咲も面食らっていりみたいだ。

「くすっ…は～い。今日はビシビシ教えてあげるから、みんな頑張ろうね。」

逆に塚原先輩は愛想良く、子ども達と挨拶してくれた。

「えぇ～！つかはらせんせ～きびし～！」

「でもたつみせんせ～よりしっかりしてるよね～！」

「うん！よ～し、僕がんばるぞ～！」

「はい、それじゃあ準備運動をしっかりしてから、順番に泳いでいこうか。」

「「「は～い！！」」」

スクール生は元気良く返事をすると、練習用レーンに移動し準備運動をもう一度行った後に、塚原先輩の合図を元に1レーン1人ずつ泳いでいく。

「すいません、塚原先輩。せっかく泳ぎに来たのに、邪魔しちゃいまして…」

「ううん。泳ぐだけならいつでも出来るし、何より子供は好きだから大丈夫よ。」

塚原先輩がパンッと手を打つと、スクール生が真面目に1人ずつ泳いでいく。

どうやら塚原先輩はほんの数分で、スクール生を虜にしたらしい。

「それにしても塚原先輩は子供を躾るの上手いですね。こいつらといい、七咲といい…」

「先輩？なんで私がそこで出てくるんですか？」

「一応部長をやっていたし…他にも委員会とか色々していたから、纏めるのは確かに慣れてるかもしれないわね。」

「なるほど…」

「確かに塚原先輩が話すとみんなが黙って話を聞きますよね。水泳部でも話が纏まらないときは大抵塚原先輩が最後に折衷案を出してくれましたし…」

「それは偶々よ。それより2人もサボってないで…ほらっ、あの子フォームが崩れてるから教えてきて。」

「じゃあ私が行きます。」

「おう。じゃあ俺はまだスクールに入ったばかりの子を集めて指導してますね。」

こうして俺達はスクール生の練習をみていった。

塚原先輩と七咲のおかげで、いつもより効率良く練習させられただ

ろう。

「今日は本当にありがとうございました！」

バイトも終わり、今度こそ泳いでいる2人に深々と頭を下げる。

ついでにバイト代とばかりに、スポーツドリンクを手渡した。

「ありがとうございます、巽先輩。」

「気を使わなくても良かったのに…」

「いえ、手伝って貰ったのに、むしろこれだけですみません！でも金無いんで許してください！」

主にそちらの方の所為なんですけどね。

「巽先輩。私は楽しかったので大丈夫ですよ。松原コーチの話とかも聞けましたし。」

七咲もあれからは持ち前のお節介スキルを発動させ、どんどんとスクール生との距離を縮めていった。

練習中なのに意外と笑いが絶えなかったみたいで、塚原先輩に何か言われて反省するシーンも見られた。

「いやいや、あとでこのプールのサービス券とかも渡すんで、それも是非使ってくれよ。勿論塚原先輩も。」

「ありがとう。…それで巽君。話は変わるんだけど…」

「はい？」

バイトも終わったことで気が抜けていた俺に、塚原先輩が少しトーンを下げて話しかけてきた。

「突然なんだけど…私と勝負してもらえないかな？１００ｍ一本でいいから。」

「へっ？勝負ですか？」

「うん。七咲自慢の先生はどのくらい泳げるのか興味があってね。」

柔らかな言葉使いで理由を説明する塚原先輩。

でも…その目はいたって真剣そのものだった。

「…本気で、ですよね。」「当たり前じゃない。」

コンマ１秒で返された。

「…一応聞きますけど、しっぽ巻いて逃げるのは有りですか？」「

無しね。」

またもコンマ1秒。

「塚原先輩？どうしたんですか？…なんだかいつもと様子が…」

七咲も異様な雰囲気に気付いてるのだろう。

実際塚原先輩からもの凄いプレッシャーを感じる。

「…んじゃちょっと飛び込みの許可もらってきますね。」

「うん、悪いね。」

「いえ。塚原先輩は準備しててください。」

「ちょっ…ちょっと巽先輩、塚原先輩！急にどうしたんですか！？」

「ごめんね、七咲。大事な先輩を借りちゃって。」

「いえ、私のでは…じゃなくて、どうしてそんなに好戦的なんですか！？」

「…」

「先輩、用意できましたよ。他にお客さんいない今なら、ということらしいんで、早速やりましょうか。」

「そう、分かった。」

「じゃあ七咲、合図頼むな。」

そういって俺と塚原先輩はそれぞれの踏切台に立つ。

七咲も諦めたようで、プールサイドまで行き俺達が入水体勢になるのを待つ。

「巽君、1ついい？」

「はい、なんですか？」

俺達は2人して入水体勢をとる。

いつ合図が鳴ってもおかしくないそんな状況に、塚原先輩は話しかけてきた。

「…私より遅かったら、七咲とのこと応援してあげないからね。」

「はぁ！？」

「スタート！」

「なっ…くっ！」

七咲の口からスタートの合図が出されたのだが、面食らっていた俺は塚原先輩が見事なスタートをしているのを後ろから見る形になってしまった。

…完全なスタートミスだ。

飛び込んで水面から顔を出したときには既に身体1つ分は離れていただろうか…

（くっ…やばい…）

必死に水を掻く…

必死に…

…

「まさか負けるとは思わなかったわ。」

「危なかった～…スタートミスった時はどうなるかと思いましたよ。」

結果は俺が最終的に身体1つ分離しての勝利。

今回もなんとか先生としての面目は躍如された。

スクール生はすでに1人もいないけどな。

「まさか塚原先輩にまで勝てるなんて…それに前より速くなってま

すよね、巽先輩！」

「まぁあれから暇な時、1人で練習してたからな。流石に七咲には負けたくなかったし。」

「…なんで水泳部じゃない先輩にそんな事を…」

なんか七咲がすごく落ち込んでいる。

なんだか分からないが、とりあえず頭を撫でておこうかな。

「でも…巽君、かなり泳ぎ上手いのね。たぶん…水泳部に今入ってもレギュラー取れる位置くらいかな。」

顔を真っ赤にする七咲を撫でていると、塚原先輩がそんな事を言ってきた。

「どう？今からでも入ってみないかな？」

「いや～…それはちょっと…。まず部費が払えないんで…。」

「そう…」

「それに急に入ってきた奴がレギュラー取っても、なんか感じ悪くないですか？そんなんで空気悪くしたくないんで。」

「そうよね…うん、私が間違ってた。」

「いや、頭下げないでくださいよ！」

急に頭を下げた塚原先輩にわたわたする俺。
「あんな卑怯なことしてまで負けたんだから、これくらいはさせてほしいな。」
それを見ても塚原先輩は頭を上げない。
塚原先輩の束ねた髪がぷらんっとぶら下がる。
「卑怯なこと…ですか？」
事情を知らない七咲は頭を傾げる。
「あ～…いや、別に何もされてないぞ。うん。」
「…塚原先輩、何したんですか？」
はい、俺の発言を七咲は完全に無視しました～。
「巽君の気持ちを確かめただけよ。」
「気持ち？」
「塚原先輩っ！！」
「ふふっ…それじゃあそろそろ帰ろうか、七咲。」
「えっ…あっ、はい。」
「それじゃあね、巽君。」

「失礼します、巽先輩。」

スタスタ…

プールに残る俺…

…塚原先輩が何したかったのかは俺の空っぽの頭では全く分からなかった。

「…俺も帰ろ。」

身体も冷えてきたので、ロッカーへと引き上げる事にした。

その後俺は2人と帰り道鉢合わせないように、少しバイト仲間と話してから帰路に着いた。

## その2

2月もあと10日程で終わりを迎えるというのに、春の兆しが感じられないこの寒さ…折角の昼休みに教室で昼寝しようとしたのに、こんなんじゃ身体が冷えてそれどころではない。

身体を必死に縮こめて机に突っ伏すも、なんら効果はない。

それでも身体を起こす気にはなれなかった。

昨晩久しぶりに勉強なんてものに手を出してみたら、まぁ進まないこと。

それでも悪戦苦闘しながらも来たる来週のテスト範囲分なんとか勉強する事が出来た。

勿論1教科だけであり…

しかも範囲は1年生の物理のテスト範囲だ。

…言っておくが、今突っ伏しているのは2－Aの机だし、去年から俺が利用している物だ。

また留年が決まったから復習している…という訳でもない。

「怜く～ん。ちょっ～といいかしら～？」

「お～い、2－Cの佐々木遼く～ん！2－Aの棚町さんが呼んでるよ～！」

ならばどうして1年生のテスト範囲を勉強していたのか…
簡単に言うと七咲に頼まれたから。
もう少し詳しく言うと…

『バレンタインありがとう』
『いえ、気にしないでください』
『お返ししないとな。何か欲しいのあるか？５００円以内なら善処するぞ』
『それじゃあちょうど1週間後の日曜日、勉強教えてください』
『勉強？』
『はい、テスト範囲が発表されたのですが、部活が忙しくてあまり勉強出来ていなくて…』
『オッケー。それじゃあ午後2時くらいに図書館で…』
『じゃあ朝の9時からお願いします。場所は先輩のお家でいいので』
『はっ？』
『折角ですんで、一日中勉強教えてくださいね、先輩。』

ということがあったから。

「そんな冷たい態度とらないでよ、だ・ん・な・さ・ま♪」

「交際は二十歳を過ぎてからと決めていますんで…」

勉強会まであと2日と迫った今日も徹夜でテスト範囲の予習をしておかなくてはならない。

きっと気の利く七咲のことだから、わざわざお金のかからない『お返し』を考えてくれたんだろう。

そんなにもしてくれたのに、こっちが手を抜くなんてこと俺には出来なかった。

それからと言うもの、わざわざバイトのシフトを変えてもらったり、綾辻さんに恥を忍んで聞いたりしながらも着々と知識を蓄えている。

「非道い…あの日永遠の愛を誓い合ったでしょ！？伝説の木の下で…あの『誓い合った男女は必ず結ばれる…』っていう…」

「ふはははは！魔王にそのような魔力が通用すると思ったか！」

というわけで俺は今日の深夜勉強に備えて、寝ておかなければならない。

それじゃあおやすみ…

「はぁ…しょうがないわね…はっ！」ドカッ！

「ギャッ！…」

「おはよ。起きれたかな～？」

「…爽やかな目覚めをありがとよ。」

後頭部から机へと突き抜けた衝撃が、俺の身体を起こす。

そしてその衝撃源を睨みつけてやる。

「そりゃもうそうとうな用があるから、こんな仕打ち受けてるんだよな、俺？」

「そりゃもう！全米が驚愕を覚えるくらいの物があるわよ～！」

笑顔を見せ、明るい声を振りまきながら、楽しそうに話すクラスメート兼悪友。

「へいへい…それじゃあ早速聞かせてもらいましょうか。その大事な大事な用とやらを。」

「えっと…ちょっと場所変えても良い？」

「じゃあ俺の代わりに俺の席に座るか？」

「…それじゃあ移すわよ。」スタスタスタ…

「…あっ、本当に真面目な話なんだ。…ったく待てよ、薫！」
先に廊下へと出て行った薫を追うべくゆっくりと立ち上がる。
どうやら昼休みの休憩時間は無くなったらしい。
次の授業は絶対寝てよう、と心に決めてから続けて廊下へと出て行った。

「この辺なら…いいかな？」
キョロキョロと辺りを見渡してから、校舎裏へと辿り着きようやく足を止めた。
察するに人目に触れない所が良かったみたいだな。
でも校舎裏は…
「昼休み終わりかけになったら、ここにも人がめっちゃ来るから気をつけろよ。」
今ミーティングをしている水泳部の部室があるのだ。

そしてそれが終わると、沢山の水泳部員がこの場所になだれ込んでくるのだ。

その中には俺を寝不足にさせる要因も含まれている。

「そうなの？…それじゃあ早めに済ませましょうか。」

「…一応聞くけど、真面目な話なんだよな？人気のない所で始末しようだなんて考えてないよな？」

早めに済ませる、という言葉に少しだけ警戒心が生まれたのだ。

いつも薫とはそんな会話しかしてないから、ついつい…な。

「…不本意ながら、あんたは全校の男子代表に選ばれたんだから、感謝しなさい。」

やけに不機嫌そうにツンとそっぽを向く。

「不本意、は俺のセリフだ。…まぁ他言無用は約束するから、好きなだけ話して良いぞ。」

「ん…てんきゅ。」

もう何度聞いたか分からない『てんきゅ』…薫独自の言語。

俺にとっては薫専用の感謝の言葉なのだ。

他の奴が使ったら、暴力的になる前に矯正してでも直そうと思って

いる。

「実はね…昨日の事なんだけど。」

---

『お会計８５０円です。…千円お預かりします！ありがとうございました！』ニコッ

『あ…あの！』

『…？なんでしょうか、お客様？』

『ぼ、ぼぼぼ、僕、あなたの事がす、好きです！一目惚れしました！』

『……へっ？』

『返事はいつでもいいので…僕待ってます！』タッタッタッ…

『あっ…お客様……おつり……ってえ～～～～！！！！』

---

「って事があったのよ。」

「その金は募金するか、交番に届ければいいんじゃないか？」

「そんな話聞いてないわよ…そのお客様、最近よく来てくれてた中学生くらいの子で、いつもはドリンクバー1杯だけ頼んで何時間も勉強してるような子なの。」

「嫌な客だな。」

「それがそういう訳でもなくて、お店が混んできたら謝りながらすぐに出て行くし、あんまりにも長く居すぎた時にはパフェやらなんやら頼んでくれるの。」

「まるで俺みたいに出来た少年だな。」

「頭が出来てないアンタと一緒にしないでよ。」

ちょっと怒気を含んだ返し。

その反応を見る限り、薫はその客の事を悪くは思ってないらしい…いや、むしろ良いくらいなのかな。

「…それで俺に何を聞きたいんだ？」

話を纏めると、バイト先の客（中学生）に告白された…ちょっとした自慢話じゃねーか。

別にひがまね～からな！

「どうやったらさ…傷つけずに断れるかな、って考えてて…」

ポリポリと頬を掻きながら、照れくさそうに話す。

視線は明後日の方向を向いているし、薫にとっては結構恥ずかしい事なんだな…とは感じ取れた。

「可愛らしくて良いお客様なんだけど、流石に付き合うとかは…ねぇ？」

「いや、知らんし。」

同意を求めてくる薫。

それを無視する俺。

女子高生らしい可愛らしい悩みを、あの薫でさえ抱えている事にも驚いているのだが、今はそれよりも他のことが気になってしょうがない。

「なぁ、薫？」

「なに？なんかいいアイディア浮かんだの？」

「それ…なんで俺に相談したんだよ？仲良い田中さんとかなら、確実に俺より真剣に考えてくれっぞ？」

もちろん俺だって真剣に考えるが…

「恵子はダメッ！絶対からかってくるから！」

…そんな理由で睡眠時間を奪われたと考えると、１００％が５０％、１０％と下がっていってしまう。

「それに男子の気持ちは男子の方が分かるでしょ？」
「それなら純一とかでもいいじゃんかよ～。」
「…いち…らい…チャ…からダメ」
「はい？」
ボソボソ喋られたら、いかに静かな校舎裏でも聞き取れない。
再度言うように促す。
「純一は桜井さんとイチャイチャしてたからダメッ！」
「っ！？……そりゃ確かに聞けないな～。」
相変わらずイチャイチャベタベタの2人にこんな話持っていっても、マトモな意見が返ってくる気がしないもんな。
イチャイチャベタベタは全く関係ないけどな。
「…分かった分かった。この話は納得した。」
「本当に面倒くさいわね～。男ならグチグチ言わないで、ハッキリ動きなさいよ！」
「へいへい。これからの活躍にこうご期待下さい、っと。」
「なんか思い付いたの！？」

「え～い、肩をつかむな！痛いっつーの！」

興奮気味の薫を落ち着けつつ、砕けかけている肩を掴む両手をゆっくり離させていく。

「え～っと…最初に言っとくが、俺には何も意見は出せない。…告白した経験ないからな。」

うわっ、恥ずかしっ！

「あ～、そんなの分かってるから！早く！早く！」

…ヘタレで悪かったな。

「…そこでプロに助言を請えばいいんじゃないかと思う。」

「プロ？」

顎に手を当て頭を傾げて考える薫。

顔が晴れない所を見るに、正解にはたどり着けてないみたいだ。

「まだ2月で良かったな。たぶん今日も学校に来てるだろうし…とりあえず行ってみるか。」

そう言うと俺は1人先に校舎内へと踵を向ける。

「ちょっ、ちょっと待ちなさいよ！いったいどこに行くのよ！？」

「この学校で告白を断るプロなんて1人しかいないだろ？」

「はぁ？そんなモテる人なんて……あっ…」

どうやら薫も閃いたみたいだな。

「そう…1人いるだろ？輝日東のアイドルとまで言われた人が。」

「すいません、はるか…じゃなくて森島先輩いますか？」

「あれ～？ヒロ君じゃない！久しぶりね！」

教室を覗き込みながら、クラスの人に訊ねている最中にあちらからこちらに近付いてきてくれた。

いちいち面倒くさいことにならずラッキーだな。

「あっ、はるか先輩、お久しぶりです。遅くなりましたが、大学合格おめでとうございます。」

「ふふ～ん、本気を出せばこんなものよ！もっと誉めてくれてもいいんだからね♪」

森島先輩はかなり上機嫌みたいだ。

受験が終わり、毎日のように塚原先輩と遊んでいるみたいだから当然か。

「あれっ？こっちの綺麗な子はヒロ君の知り合い？」

上機嫌に鼻歌なんかを歌っていた先輩が、ようやく俺の隣に立つ薫の存在に気付く。

「初めまして、森島先輩！私２－Ａの棚町薫って言います！よろしくお願いします、森島先輩！」

「うん、良い挨拶ね～！グッドよ、薫ちゃん！」

よしよし…薫の事も気に入ってくれたみたいだ。

続いて…

「それでそんな素晴らしい『先輩』に、『先輩』に比べてまだまだ未熟な後輩から聞きたい事があるのですが…お聞きしてもよろしいですか、『先輩』？」

ここで『先輩！』を強調しておくのがポイントだ。

「もっちろん！可愛い後輩の頼みならなんだって聞いちゃうわよ！」

狙い通り機嫌良く…何も疑わず話を聞いてくれる。

隣で呆然とする薫の姿が見えるが、直に慣れるだろう。

「実は…告白を断る方法が聞きたいんです…」

「告白を断る方法？」

「はい。森島先輩はそういう経験が豊富だと風の噂で聞きまして…」
実際は本人、もしくは塚原先輩経由で七咲から聞いたのが殆どだ。

「う～ん…そんなに多くはないと思うけど～…」

「えっ？これって嫌み？」ボソボソ

「これが素だから気にするな。」ボソボソ

「えっ？何か言ったかな？」

「「いえ、なにも。」」

「そう？……ん～、あんまり参考になるか分からないけど…」

「お願いします『先輩』！私達、『先輩』しか頼れる人がいないんです！」

おっ、早速森島先輩の扱い方が分かってきたみたいだな。

「も～、可愛い後輩の頼みじゃ断れないじゃない。」

「ありがとうございます！森島『先輩』！」

よし、森島先輩陥落。

「そうでさねぇ～…例えばあそこにいる…誰君だっけ？…まぁいいや。彼には『もうちょっとだけ情熱的な人が好きなの』…って言って断ったの。」

グハッ！

「それであっちの…田中君？中田君？には『私ふわふわできる人が好みなの』…って言ったかな。」

ゴフッ！

「それでここにいる安田君には…「先輩！もう止めてあげてください！」…ほぇ？」

「あっちゃ～…屍が2つも出来ちゃったわね…」

「つーかめちゃくちゃ心に傷を負ってたな。」

屍の周りには憐れみの目を向ける男子生徒が多数存在していた。

…もしかしたらあれが自分に起こらずホッとしている人もいたかもしれない。

少なくとも安田先輩？はホッとしているだろう。

「あのですね…聞きたいのは相手を傷つけないで断る方法でして…けして致命傷の与え方じゃないんですけど…」

「？でもみんな断った時、笑顔で見送ってくれたよ？」

「あ～…その人たちを思い浮かべると、涙が出てくるわね…」ボソボソ

「男のプライドだったんだろうな…」ボソボソ

俺と薫それぞれがついつい手を合わせたくなるような事件だった。

「……」

「森島先輩？」

そこで急に森島先輩が真面目な顔をして、俺の顔を凝視し始めた。

そして一瞬だけ固く閉ざされていた口を開く。

「ヒロ君…もしかしてそういうことを聞くのは…逢ちゃんの事を振るつもりだからなの！？」

「……はい？」

今なんと？

「やっぱりそうなのね！ダメよ、ヒロ君！君はヒーローなんだから、女の子を泣かせるような事をしちゃダメよ！」

「ちょっ！ちょっと待ってください先輩！別にそういう話ではなくて…」

「へぇ～…いつの間にか七咲さんとそんな話になってたんだ～…」

「薫も面白そうな物見つけた、みたいな顔すんな！」

「ちょっと、廊下では静かにしなきゃダメよ、巽君。」

「つ、塚原先輩！？」

なんて悪いタイミングに！

「あ～聞いてよ、響ちゃん！ヒロ君ったら、逢ちゃんの気持ちを踏みにじるんだって！ひどいでしょ！？」

「その説明がひどいですよ！！」

「巽君…私の後輩に、何しようとしてるのかな？」

「塚原先輩も事情を聞く前に、そんな蔑んだ目で見ないでください！」

あぁ…人がどんどん集まっていく…

また変な噂が流れるんだろうな～…

そしてまたクラスの奴らからボコられるんだろうな～…

その後顔の体積が1、2倍程に膨れ上がった俺は、薫が結局どういう風な断り方をしたのかは知らないままこの話は終了した

## その3

踏切板の上…ここから私の戦いは始まる。

部長の吹くホイッスルの音を聞いて、私を含めた踏切板の上に立っていた部員が、水面に向けて飛び込んでいく。

自分の身体をピンと伸ばし、出来るだけ抵抗を無くしつつ水中を進んでいく。

身体が浮上してきたら、そこからは全身を使ってひたすら前に進むように水を掻いていく。

力を入れすぎず、身体がぶれないように…それが私の理想のフォーム。

そして先輩から頂いた助言だ。

私の小さな身体は自分でも分かるほど、グングンと水面を進んでいく。

５０ｍのレーンを泳ぎきり左右を見渡すといるのは私１人。

それを見て私は誰にも見られないように、水中で小さくガッツポーズをした。

この頃というものかなり調子がいい。

練習とはいえ、先輩達と一緒に泳いでも連戦連勝。

自己ベストも週ごとに更新されていくくらいだ。

すでにスタートしている後続の邪魔にならないように、ヘリに手を掛け身体を水中から出す。

熱く火照る身体を心地良く冷やしてくれていた水がなくなる。

「ふぅ…」

ゴーグル、水泳キャップを外し、顔を持ってきていたタオルで拭いた。

もう1年の高校生活で最後のテスト週間に入るので、明日からは部活動禁止期間になる。

そのためか今日の練習は少し軽めであり、練習後にミーティングがメインみたいだ。

…最後なんだからちゃんと練習したいのに。

ラスト一本を泳ぎ切った部員が次々とプールサイドに上がっていく。

もうすぐ集合がかかり、今日の練習は終わるだろう。

まぁテスト週間に入っても、先輩のバイト先に行けば練習は出来るので特に不満を口にすることはなかった。

…むしろキッカケを作ってくれて感謝したいくらい。

巽先輩…私の初恋の相手であり、今でも想い人である。
ちゃらんぽらんで鈍感で…練習とかすぐにサボっちゃう人。
でも誰よりも優しく、綺麗なフォームを持っている人。
「考えてみたら、私先輩のフォームに惹かれただけなのかな？」
…そんな事絶対ない。
だって先輩が私に向かって笑うだけで…
心配するだけで…
褒めてくれるだけで…
私の気持ちはこんなにも満たされる。
…どっぷり浸かっちゃってるな…。
「七咲、ちょっといいかい？」
「？あっ、ごめん。ちょっとボーッとしてたみたい。」
いつの間にか近くにいた同じく1年の男子部員に声をかけられていたみたいだ。
いけないいけない…先輩の事考えていると、いつもこんな具合になってしまう。

「無視しちゃってごめんなさい。それでどうしたの？」

「今日さ…部活終わってから時間空いてる？」

ピンポーン！

指でチャイムを押すと、中からガタガタという音が聞こえるようになった。

ガチャガチャ、ガチャ！

「お～っす。おはよう、七咲。」

「おはようございます、巽先輩。」

「まぁとりあえず上がってくれよ。ちょっとばかし汚いけどな。」

「先輩の事だから、昨日寝ないで掃除してると思いますし、その心配はないでしょうね。」

目の隈が如実に表している。

「…まぁ入ってくれや。」

「はい。」

ローファーを脱いで、先輩の家へと踏み入れた。

お母さんに言い訳を出来るように、学生服で先輩の家に来てしまった。

本当なら美也ちゃんや中田さんに手伝ってもらって決めた新しいお洋服を着てきたかったのだが…嘘を吐く後ろめたさが私に制服を着させていた。

「早速始めるか。七咲が苦手な教科って何なんだ？」

「今は…物理ですね。数学は先輩のお陰で成績が上がりましたし。」

テーブルに物理の教材を出しながら、先輩の真向かいに座る。

「それじゃあとりあえず物理から見ていくか。え～っと…確か教科書９３ページからだよな？」

「はい。それではお願いします。」

と言ってもひとまず私が問題に取り組んでみなければ始まらない。

数学といい物理といい計算科目が苦手な私には、どこがマズくどこが分からないのかが分からない。

よって自分で解いてみなければ、先輩としても教えようがないだろう。

カリカリカリ…

その間、先輩は自分のテスト範囲の勉強をしている。

やはり勉強は苦手みたいで、始めて数分なのに見てわかるほど集中出来ていなかった。

学校では少しは整えられているボサボサの髪をガリガリと掻き、考え込んでいる。

そんな普段の先輩とは違う整えられていない髪の毛を見るだけで、自分は特別な人間なんだ…なんて優越感に浸れる。

…まぁ先輩の事だから、何も考えずそうしているだけなんだろうけど。

「ん？分かんなくなったのか？」

「あっ…はい。ここなんですけど…」

手の止まった私に先輩は目ざとく気付き、すぐさま自分の手を止めて私のノートを覗き込んだ。

「あぁ…ここはな、……」

「先輩、お待たせしました。」

「おっ、サンキュー。」

先輩の前に湯気を立てた焼きそばを置く。

勉強を教えて貰っているお礼ということで、お昼ご飯は台所を借りて私が作った。

最初は作らせることを渋っていた先輩も、材料まで用意していた私の熱意に圧されて黙って座っていてくれた。

「でも先輩…どうやって生活してたんですか、って聞きたいくらい冷蔵庫に何もありませんでしたが…」

「あぁ……昨日使い切っちまったからな。いつもなら…山のようにもやしが入ってる。」

「…野菜を摂っている…とは言えませんね。」

「そういうのは純一んちの朝食で摂ってるから。」ムシャムシャ

「…お野菜も持ってくれれば良かったかな。」

「お～い、今日は何しに来たんだ～！」
先輩に会いに…に決まっている。
「ふぅ…ご馳走さん！旨かったわ！」
「ふふっ…お粗末様でした。」カチャカチャ…
「あぁ…洗い物くらい俺がするから、水に浸けとくだけでいいからな～！」
「いいえ、これくらいなんともないです。すぐに済みますので、先輩は先にお勉強進めてください。午前中５ページしか進まなかったんですよね？」
と言いつつすでに手には泡立つスポンジが握られている。
「…だからってお客様にやらせるのは…ふぁ…なぁ？」
「そのお客様から何度もお弁当を貰っているのは誰ですか？」
ついつい意地悪い言い方をしてしまう。
私は先輩にとっては『お客様』らしいから、存分に上から目線で攻めよう。
「それとこれとは話が…」
「い～え、一緒です！…っともう終わりましたし、この話もおしま

いですね。」

洗い物で濡れた手を、先輩から借りたエプロンで拭く。

「早っ！七咲はあれか！？食器洗い部にでも入って、日々特訓してるのか！？」

「そうですね。それじゃあ午後もよろしくお願いします。」

「…無視は心に響くな～。」

午前中は先輩にみっちりと物理について教えてもらったので、午後は化学でも教えてもらおう。

お昼ご飯を食べて少し元気を取り戻したので、午後も頑張るぞ。

「ふぁ～…次は化学か？」

「…先輩はやる気を削ぐ天才ですね。」

先輩の欠伸と一緒に私の中の何かが抜け出ていった気がする。

「あぁ…悪い悪い…それで…次…ふぁ～…化学か？」

「全然悪びれて無いですよね、先輩。」

寝ぼけ眼を擦りながら、向かいに座る私の教科書を覗き込む。

「先輩凄く眠そうですけど、本当に徹夜してエッチな本を片付けていたんですか？」

「そんなもん買う金があったら食欲を満たす…」

「先輩らしいですね…」

「あぁ…それで…ここの問題だけど…」

指先をぷらぷらと揺らしながら、急に問題の解説をし始めた。

「先輩、無理しなくていいですよ。少し休んでてください。」

「ん〜？大丈夫大丈夫…」

ついに首をかくんかくんと上下に揺れ始めた。

「はぁ…」

溜め息を一つ吐き、先輩の隣まで歩いていく。

「先輩…勉強の邪魔になるので、ベッドで休んでいてください。」

グイッと先輩の腕を引っ張って、ベッドへと無理矢理連れて行く。

…よくよく考えたら、私凄いことしてる。

「ふぁ〜…悪いな、七咲…飯食ったら眠くなっちまった…ｚｚｚ…」

「…もう寝ちゃった…」

そっと先輩に毛布を掛ける。

もぞもぞと毛布の中でうずくまりながら、寒そうに身体を震わす。

「もう…しょうがないですね、先輩は…」

毛布の上から近くにあった掛け布団を敷く。

そこで先輩は満足そうな表情を浮かべて深い眠りに入っていった。

「はぁ…」

こうしてみるとまるで郁夫の世話をしているみたいで、なんだか期待していたような展開にはならないみたいだ。

先輩の寝顔を少しばかり眺めた後、もう一度テーブルの前に座り込む。

テーブルの上に広げられたノートをひとまとめにして、それをを先輩の鞄の中へ入れておく。

「ふぅ…」

さっきから溜め息ばかり吐いている気がする。

「…先輩のバカ…」

急に静かになった部屋で、私はテーブルに突っ伏した。

こうやって私が部屋に来たのに、疲れているからって寝ちゃうなんて…

私だって…疲れてるのにな…

『あの野郎、七咲のこと振るらしいぞ！』

……

また嫌な事を思い出してしまった。

昨日の部活終わりに、急に同じ部活の男子生徒に告白された。

わざわざ人気のいなくなったプールサイドに連れて行かれ、そこで急に伝えられた。

『七咲の事が好きなんだ…』

それは伝えて欲しい人からではない人生初めての告白。

だから私はその告白を断った。

「本当に…先輩は…」

『あの野郎、七咲の事振るらしいぞ！』

あの時の男子生徒の叫びが頭の中に響く。

捨て台詞のように吐かれた…罵倒のような叫び。

つい私はその男子生徒を睨んでしまったのを覚えている。

「先輩…」

ふと思いつき、私はすくっと立ち上がる。

胸に手を当てながら、先輩の眠るベッドへと近づいていく。

先程まで寒さでうずくまっていたのだが、今は仰向けに寝相良く眠っている。

少し躊躇いつつも、私はそのままベッドの上へと上がり込んだ。

「よい…しょ。…ふふっ、先輩。」

先輩を起こさないようにそっとベッドの上を移動し、眼下に先輩の顔を収める。

…先輩の上に覆い被さるように、私は手足をベッドに突いた。

端から見たら私が先輩を押し倒したような形。

そんな事を思って、また顔が少しばかり朱くなる。

「先輩…起きてますか？」

……ＺＺＺ…

「実は今日…私の誕生日なんですよ？知ってましたか？」

……ＺＺ

「先輩に誕生日を祝って貰いたくて…でも先輩の負担になることはしたくなくって…」

……ｚｚｚ…

「だからバレンタインを口実に、先輩と一日中逢うことにしたんです。…まぁ実際私にはとっては十分プレゼントになりますし。」

……ｚ…

「…先輩。実は私昨日告白されちゃったんですよ？同じ部活の人から。」

…ｚｚｚ……

「私その時は断ったんですけど…いつまでも誰とも付き合わないなんて事ありませんからね。」

……

「その時になってから、先輩が告白してきたって……ダメなんですからね。」

……ｚｚｚ…

「だから……だから……早く私を捕まえてください……」

……

「私こんな性格だから、強い人間だって思われがちですけど……不

安で仕方ないんですからね…」

……

「本当に先輩は私に振り向いてくれるのか……付き合い始めたら、本当に先輩は桜井先輩のこと忘れてるのか……私と比較してがっかりしないか……」

……

「私がこんなに弱くなったのは先輩の所為なのに…先輩の事嫌いになれなくて……むしろ頭から離れなくなって……」

……

「そういえばですね。最近先輩の分までお弁当作る回数が多くなったの、お母さんに茶化されたんですよ？……『彼氏でも出来たんじゃないか？』って…」

……

「先輩……私ツラいです……今日また一歩先輩に近付いて、また9ヶ月後に一歩離されて…でもそのまた3ヶ月後一歩近付いて……こんな永遠に縮まらない追いかけっこしたくないんです……」

……

「先輩に……もっと近付きたいんです。そばにいたいんです。

……『好き』って言われたいんです……」

……ｚｚｚ

目頭が熱くなっている。

起こさないように大きな声を出さないで、先輩に語りかけていたら自然とこぼれてきた。

『起こさないように…』が聞いてあきれる。

その涙は先輩の首筋辺りに何滴もこぼれ落ちていたのだから。

本当は聞いて欲しかったのかもしれない。

慰めて欲しかったのかもしれない。

強く抱きしめて欲しかったのかも……

「これが……初恋なんですか？先輩も初恋は痛かったんですか？」

……ｚｚｚ

「……そうだと言うなら、私は耐えて見せます…耐えて耐えて耐え抜いて、先輩を…先輩に捕まえて貰います…」

……ｚｚｚ…

「その時は先輩…覚悟してくださいね…今までの分帳消しにするく

らい、先輩を感じさせてもらいますから…ね。」

……う〜ん…

「ですから……その時の前払い……今、お願いします……」

……

私は両腕を折り曲げて、顔を下げていった…

トントントン…

「ふぁ〜…七咲？」

まな板と包丁による音が、俺をゆっくりと覚醒させた。

窓の外からはどす黒いオレンジ色の光が差し込んでいる。

…どうやら４時間くらい寝てたみたいだ。

ジャッ…ジャッ…ジャッ…

今度は何かを炒める音。

それとほぼ同時に、香ばしい匂いが部屋中に充満していく。

ベッドから立ち上がり、寝起きによりふらふらの足で一度机に寄ってからキッチンへと向かう。

そこには案の定、後輩の姿があった。

「七咲、おはよ～さん。」

「全然早くないですよ、先輩。…せっかく勉強教えてもらえる約束だったのに…」

うっ…顔も合わせてくれず、いきなり説教モードに入りつつある。

流石に3時間は寝過ぎたよな～。

「すまん…全く起きれなかった…」

「そ…はよかっ……です。」

「ん？」

「その所為で勉強がはかどらなかったんです！」

いまだ顔を合わせないまま、七咲は急に大声で叫んできた。

「うっ…本当に悪かった！バレンタインのお礼だったのに…」
「そうですよ。私から提案したとはいえ、先輩にはそれを果たす義務が有ったと思います。」
「重ね重ねすみません…」
七咲の機嫌はマックスに悪いみたいだ。
…まぁそりゃそうか。
でも今日は秘密兵器がある。
「七咲…じゃあこれで許してくれないか？」
「えっ？」
良かった、ようやくこっち向いてくれた。
「ハッピーバースデートゥユー、七咲。」
「先輩…知ってたんですか？」
「まぁ情報網が広いもんでな。勝手に入って来ちまうんだよ。」
単に美也ちゃんに言われただけだが。
「まぁそれはともかく受け取ってくれよ。かなり安物だけどな。」
グイッとに突きつけるように、長方形の箱を渡した。

七咲は少し申し訳なさそうに包装紙を剥がしていく。

「これ…ヒモ…ですか？」

「ミサンガ…って言うんだ。知ってるか？」

「いえ…これは何に使うものなんですか？ヒモにしては短いような…」

使い方が分からないからか、カラフルなミサンガをぷら～んと垂らしている。

「それはな、手首とか身体の一部に身に付けて、それが自然に切れたら願い事が叶う、っていう一種のおまじないみたいなもんだよ。」

「おまじない…」

「いや、七咲おみくじ引いたり、絵馬買いたりするくらいだから結構好きなのかな～って思ったからさ。昨日徹夜して作ってみたんだ。」

「えっ！？これ先輩が作ったんですか！？」

「大したことないって。時間掛かりすぎて、寝る時間無くなったんだからさ。」

予定では2時には寝れるはずだったのに…気付いたら6時になってたんだよな～。

「見ての通り手作りだから貧弱だけど、是非使ってみてくれ！願いが叶うかは知らん！」

「…き…誕生日プレ……もら…たのに…」

「ん？何か言ったか？」

「い、いえ！何でもないです！ありがとうございます！」

今度は急に焦ったように叫んできた。

顔も真っ赤だし、大丈夫か？

「まぁ喜んで貰えたなら良かったけど……大丈夫か？」

ひょいとうつむきがちの表情を覗き込む。

「〜〜っ！？先輩！私そろそろ帰りますね！」

「あっ、あぁ。」

「それじゃあ失礼します！今日はありがとうございました！」ダッ…バタン！タッタッタッ…

…

「何かすげー勢いで帰っていったな〜。」

俺は七咲が作っていた料理をかき混ぜながら、ドアの方をボーっと見ていた。

「喜んで…くれたんだよな？」

いまいちハッキリしない態度をとられたので確証がもてない。

「まぁいっか。とりあえずメシメシ～！」

今はそれよりも七咲が作ってくれたこの料理を平らげることに集中しよう。

俺はそれを皿に盛ると、何故か片付いているテーブルへとそれを持って行った。

## その４

「はいよ～、何にするんだい？」

「いつものと明太子で。」

「おや、久しぶりじゃないかい。貧乏学生君。」

「そうっすね。ちょっと寝坊しちゃいまして、弁当作れなかったんすよ。」

食おばに銀の硬貨３枚を手渡す。

「はいよ。しっかし相変わらずだね～。よくそんなんで倒れないよ。」

食おばは注文を受けると、話を続けながらも食事の用意をする。

マスクをしているとはいえ、相変わらず元気のいいおばちゃん（５４）だ。

「いや、この頃はもやし以外もちゃんと食べてたんですよ。」

トレイを一枚取り、その上に箸を一膳用意する。

「何食べてたんだい？」

「大豆です！節分の時安売りしてたんで、２ｋｇは食べましたよ！」

「…あんた本当によく生きてるよ…はい、サービス！」
勢い良くトレイに置かれたのは山盛りのご飯と明太子。
いつもの（小ライス）より2倍くらいは、小さな茶碗に詰められていた。
「おっ、ありがとう、お姉さん！今日も美人だね！」
「言われなくても分かってるよ…っと、あとコレもね。」
トレイを持って立ち去ろうとしたら、急に小さな物体をポイッと放ってきた。
その物体は上手いことトレイの上に着地する。
「美人のお姉さんからのバレンタインチョコだよ。愛をたっぷり込めてやったから、泣いて喜びながらお食べ。」
「……あっ、明日はバレンタインか。忘れてたな～。」
2月13日（土）、土曜日だというのに午後までたっぷりと授業がある日。
なんでも学校行事に張り切りすぎて、授業数が足りず、3学期だけこういうことになったとかそうでないとか…
まぁとにかくあと1時間授業があるのだ。
「おい、坊主。どうしてそっとチョコを置いていこうとしてんだい

？」

チッ…バレたか…

「3倍返し、って言うんだろ？楽しみにしてるからね。」

「3倍の球速で投げ返すから許して！」

「なんの嫌がらせだい！」

まぁ投げたら投げたで、更に3倍返しされそうで怖いな…

「だから今日はこんなに食堂が空いてんのね？」

４時間目の授業が終わってから２０分は経っているのに、殆ど食堂はがら空き状態。

普段なら大混雑なのだが、俺の他に並ぶ人もいないので、食おばとゆっくり話すことも出来たのだが…。

「毎年だよ。女の子は比較的変わらないんだけど、アンタみたいなモテない男の子が全く来なくなっちまうんだ。」

「もう1つ貰ってます～！」

数十秒前に貰ったチョコがトレイに置いてある。

「ほう、アンタみたいなモテない男子にあげるなんて…そいつは慈悲の心で満ち溢れてるんだろうね。」

「悪意しか溢れてないでしょ。」

「まぁアンタも今から女の子にアピールしてみればいいんじゃないかい？もしかしたら奇特な子から貰えるかもしれないよ？」

「危篤の人からは貰えたしね。」

「…アンタのその減らず口は一生直らないだろうね。」

そうこうしているうちに、女子生徒の集団がこちらに向かってきた。

たぶん食堂を利用しにきたのだろう。

「それじゃあ来月は１５０ｋｍ出してみせるから。」

「はっ、フライパンで打ち返してあげるよ。」

食おばも変わらず元気だ。

たぶんあと５０年は食おばをやれるだろう。

腹も膨れ気分が良くなった俺は、食事を終えるとそのまま真っ直ぐ教室に帰らないで屋上へと向かった。

食おばに聞いてようやく納得出来たのだが、今日クラスの男子の様子が少し…いやかなりおかしかった。

梅原は髪をソフトモヒカン風にして登校し、ケンは休み時間の度に机の中、ロッカー、下駄箱を見に行き、マサは椅子にどっかりと座り、何かを受け止めるような体勢でずっと手を広げていた。

今朝梅原に聞いても『今日は…ジハードだからよ…』としか言われなかったし、ケンやマサも頷くだけ…何がなんだか分からなかったのだ。

たぶんきっと間違いなく、この昼休みも同じ行動をとるだけでなく、ちょっと女の子にアピールするくらいしているだろう。

邪魔するのも悪い、という思いが屋上に足を運ばせたのかもしれない。

「でも屋上も混んでるかな?」

そういえば廊下には口笛吹きながら1人で歩いている男子を、食堂から屋上までのルートで3人はみた気がする。

あえて1人になって女の子から渡しやすく…といった安易な考えなんだろう。

1人になる…といった意味では俺も大差ないか。

食堂に誘っても梅原が来なかったり、純一は梨穂子の所に行っちゃったりしたからな。

「到着…っと。意外に空いてんな～。」

予想に反して屋上に人はいなかった。

確かに今日は格段に寒いので、お店なら閑古鳥が鳴く位人気がないのだが、それは今日とて変わらないらしい。

俺も北風に震える身体に鞭打って手すりにもたれかかる。

俺はポケットからオレンジの手袋を取り出して、それを身に着ける。

これで少しはマシになるだろう。

手すり越しに校庭や街並みをボーっと見下ろす。

今日がバレンタインデーではないのだが、町中でこのイベントに一喜一憂してるのではないかと感じた。

学校近くの洋菓子屋もなにやら旗を掲げて、何かを宣伝している。

おそらくバレンタインチョコの事だろう。

「熱心なこって。」

そんな主に男子が一喜一憂している中、俺は全くそんなことなく普段通りの生活を送っていた。

毎年バレンタインデーにチョコは貰っていた。
母親や姉ちゃんのを含め3つ…たまに4つ。
それが高校に入ってからは0になった。
母親や姉ちゃんは近くにいなくなったので、バレンタインに顔を合わさなくなったから。
もう1つは中学1年から貰ってない。
「ん？あれは…」
いろんな場所をキョロキョロ見ていたら、見知った人物が屋上に1人でいることに気が付いた。
せっかくだから声掛けてみよう。
「お～い、中多さ～ん。」
「えっ…あっ…巽先輩…」
屋上の隅っこの方に1人ぽつんといたのは中多さん。
俺と同じように校庭などを見下ろしていたみたいだ。
「こんな寒い日にどうしたの？」
「…ちょっと…教室に居辛くて…」

ん？気のせいか？なんだか中多さん、少し身構えてるような…

「居辛い？何かあったの？」

「いえ…今朝からちょっと視線を感じていて…」

視線？

「それってやっぱりクラスの男子から？」

「はい…」

あぁ…それで身構えてるのか。

「明日はバレンタインだからね～。きっとクラスの男子は中多さんからチョコが欲しかったんじゃないの？」

「えっ？」

「男子が1つのチョコを手に入れるために、1週間前くらいから女子に優しくなる日のこと。中多さんはずっと女子校だったから、初めてだもんね。」

「あっ…いえ、前の学校でも友チョコとかはありましたけど…」

「あっ、そうなんだ。まぁバレンタインなんてあげたきゃあげればいいし、そうでないなら無視すればいいんだからあんまり気にしない方がいいよ。」

って言っても気弱な中多さんの事だから、そんな事出来ないんだろ

うな～。

それで何も出来ないから屋上に逃げてきた、っと。

「まぁいきなり大勢の男子から見られたら、緊張しない方が難しいしね。でも今日を過ぎちゃえば大丈夫だからちょっと我慢してあげて？男子としては『ジハード』なんだから。」

「そう…なんですか…」

中多さんが凄くブルーになっている。

そりゃこれから帰るまで1時間ちょっとといい、男子慣れしてない中多さんからしたら生きた心地しないだろう。

『ジハード』発言からまた警戒心高めてるし。

参ったな～…

「別に俺はそんな事思ってないから…なんて言っても信じれないよな…」

「い、いえっ！巽先輩は平気です！」

「ありがとうね、中多さん…」

それでそんな警戒するのも逆にマズくないか？

これから本当に男と話せなくなる気がする。

…ちょっとちょっかいだすか。

「それじゃあ友達記念としてこれあげるよ。」

そういってポケットから1つの小さなチョコを取り出す。

「えっ？これって…」

「友チョコ。やっすいチョコだけど勘弁して。愛は詰まってるらしいから。」

お～、みるみる顔が真っ赤になってく。

「でも…私は用意してないです…」

「ホワイトデーでいいんじゃない？そん時チ〇ルチョコ1つくれればいいからさ。」

友チョコに3倍返しなんてないだろうし。

「でも…」

「友チョコが嫌なら先輩からのプレゼント、って事でいいから。」

少しばかり離れていた距離を一歩で詰め、無理やり手に握らせる。

「きゃっ…」

「はい、確かに渡したから…って手冷たっ！」

「ひっ…あっ…その……ずっと屋上にいたので…」

あら～、完全に驚かせちゃったみたいだ。

「それじゃあこれも貸したげるよ。」

再び一歩距離を置き、少し離れた位置から身に着けていた手袋を渡す。

「それもホワイトデーに返してくれればいいからさ。結構大事な物だから、丁寧に使ってくれよ？」

「えっ！…それならお返しします…」

「いいっていいって。ちょっと慣れときたいしさ。」

「…？」

「あぁ、分かんなくて大丈夫だから。あげるのは今は無理だけど…1ヶ月くらいなら手放せるだろうし。預けていいでしょ？」

「は…はい。大事にしてますね。」

「じゃあ早速着けてみてよ。寒いんでしょ？」

「は…はい。」

そういって中多さんの手がオレンジ色へと変色した。

「他人の手にいく…ってか。」

「どうしたんですか、巽先輩？」

頭を傾げて俯く俺の表情を見てくる。

「何でもないよ。それじゃあ俺はそろそろ行くわ。」

「あっ…ありがとうございました。」

へいよ～と後ろ手に振りながら、俺は1人先に校舎内に入っていった。

あと少しでチャイムも鳴るし、いつまでも屋上にいたら中多さんも気まずいだろうしな。

「あ～！やっと見つけたよ～！」

「梨穂子さん、そんな急いで、どこに行く？」

五七五口調で汗だくでいきなり階下から現れた梨穂子に訊ねた。

「はぁ…はぁ…ずっと…探してたんだよ～？」

手を腰の位置に当てながら、息を整えている。

「えっ？なんか約束してたっけ？」

「えへへ～…はい！これっ！」

勢い良く前に出された両腕…

そこには白の紙袋が…

「バレンタインだからね～。頑張って作ったから食べてね！」

どうやらその中身はチョコらしい。

「いや…もう何年も貰ってなかったのにどうして？」

「だってそれも『好きな奴がいるなら、好きな奴だけにあげるんだよ！じゃないと一生純一と付き合えないぞ～！』って言ってたから、もう大丈夫でしょ？」

…

…やべっ…早速手袋返してもらいたくなっちまった。

「…3倍返しはしないからな。」

「ずっと助けてもらってたから、そのお礼だよ～。だからお返しもいらないからね？」

「そういうこと俺が出来ないのは彼氏から聞いてるだろ？」

「えへへ～、だってリョーなら絶対私が喜ぶものくれるし～。」

「はいはい。そんじゃありがたく頂くな。」

やっぱり梨穂子は俺のことを真綿で縛り付けるんだな。

## その5

夕焼けがまぶしいとある春の一日。
今日も心地よい風が私の髪をさらさらとたなびかせた。
あたりには金色に光り輝くタンポポの群生地があり、そのためかなんだか柔らかな春の香りが漂っている気さえした。
ついその香りにつられるように私は土手沿いから少しずつ離れた。
くるぶしあたりまで伸びた草をかき分けるように進んでいく。
向かう先には先程は遠くから見えていた金色の群衆。
一歩一歩近づいていくにつれてだんだんと香りが強くなっていく。
またその香りを運んでくれる風さえもなんだか特別な感じがして、
私をやさしく包み込んでくれているようだ。
ようやくタンポポの群生地へとたどり着いた。
私はタンポポが生えそろっていないところに、スカートに折り目がつかないように注意しながら腰を下ろす。
あたり一面…とは言わないが、両手を広げてもまだ足りないほどの範囲に金色の点が存在していた。

すぅ〜…はぁ〜…

ここで大きく深呼吸、体中に春が満ちていく気がした。
すっかり春の陽気にやられてしまった私は、体育座りになっていた体をそのままぱたんと倒してそのまま寝っ転がる。
うん…うまくお花をつぶさないように倒れることができた。
顔の隣にぴょこんとタンポポが一輪咲いていて、なんだか私のために用意されていたのかのようで自然と笑みがこぼれた。
遠くから小学生かはわからないけれど、元気な声が聞こえてくる。
ころっと首を傾けるとカラーバットを握りしめ、少し離れた所からボールを投げようとしている子供たちがいた。

ギュッと力強く握りしめるさまがいやに懐かしく感じる。
昔は私もああやってみんなで野球をしたんだっけ。
運動音痴の私はフライ…だっけ、とにかく高く上がったボールを取ることすら満足にできなかったので、一番多くバッティングをやらせてもらっていた。
ピッチャーを純一がやって、ボールをキャッチャーがリョー。
場合によっては美也ちゃんだったりその当時のクラスメートだったりがポジションにつくのだが、この3人の関係だけはほとんど変わらなかった様な気がする。

パコン！

軽快な音が夕暮の空に響いた。
バッターの子が見事に球を打ち返したみたい。
遠くから見ても『力入ってるな～』って思ってたのに、あんなに大きな当たりを打てるのだからきっとあの子は運動神経がいいんだろう。
私は何度もリョーに注意されてようやく力を抜いてバッティングができるようになったのに、結局ほとんど打てないまま野球しなくなっちゃったんだよね。
きゃっきゃっ喜ぶ男の子を見て、すごく昔のことが懐かしくなってきた。
すごく…といってもせいぜい4年前くらいだけど…
あの頃は本当に仲良かったな～…って今考えると思う。
もちろん今でも一緒に帰ったりするし、遊びに行ったりもするけど……だんだん減ってきている気がする……間違いなく。
そうはいっても昔が異常だったのだ。
遊ばなかった日はないというくらい毎日3人で集まっては公園なり誰かの家なりに集合して、これまた野球なり人生ゲームなりをしていた。

それこそ飽きることなく何時間でも時間が許す限り…何度同じことをやっても全く飽きることなんかなくて…いっつも笑顔で過ごせていた気がする。

ヒューっと少し冷えてきた風が一瞬強く吹いた。
それにより顔の真横で咲いていたタンポポがぴしぴしとほほにぶつかる。
さっきまでタンポポに誘われてここに居座っていたのにいつのまにかそのことを忘れていて、思い出させるように存在を主張してくる。
それでも私が思い出すのは昔のことだった。
ただし今回はタンポポも関係してくる。

それは…いつだっただろう…あまりにも一緒に遊びすぎていつのことだったかも忘れてしまったが、その時は私達に美也ちゃんを加えた4人で遊んでいたときだ。
場所はこの川原…いつものようにバットとボールを持ってここまで来た私達だったのだが、美也ちゃんが『もっと女の子らしいことしたい～！！』と駄々こね始めたことがきっかけ。
その時に困る2人を引き連れて私が連れてきたのがこのタンポポの群生地。

『このタンポポでアクセサリーを作ろっ！！』

運動音痴の私だが意外に家庭科の才能はあったみたいで、縫物などの授業ではほかの生徒よりも少しばかり早く縫い上げる、といったことがしばしばあった。
それを生かしてのアクセサリー作りを発案…だったのだが、どう結んでいけばいいかも分からずできていくのはぼろぼろの王冠…に仕立てようとしたタンポポのわっか。
そんな強く風が吹けば崩れてしまいそうなそれをみんな嬉しそうに

そっと持ち上げて、交代で頭の上に乗せて楽しんでいた。
それからはみんなが私から教わりながら、一人一つずつ作製…それでもお手本がうまくできないのだからみんなうまく出来っこなかったんだけど、真剣に私からアドバイスを聞いて作ってくれるのがすごくうれしかった覚えがある。
野球にしたってかくれんぼにしたって私はみんなから教わる立場だったから、小さなことでもみんなの役に立てたことがうれしくて…

さわさわさわ…

風でによってこすれあう草木の音で、ようやくあたりが朱から黒の世界へと移行しつつあることに気がついた。
よくよく見れば野球をしていた子供たちもいない。
この川原には私一人しかいなくなっていた。
むくりと顔を上げあたりを見渡してそれを確認する。
いつの間にか眠ってしまったのだろうか…というくらい景色の変化が早かった。
しん…っとした川原の風景、それを認識しつつもまだ私は動く気になれなかった。
昔はこうして遅くまで遊んでいた私達をお母さんが迎えに来てくれたな〜という思い出にふけっていたから。
べつに誰のお母さんが…とは決まっていない。
たぶん電話とかして誰が行くのか決めていたんじゃないだろうか。
毎日毎日のことだったからお母さんも心配というより呆れた表情のほうがよく浮かべていた気がする。

「こんなところでなにやってんだ？」

「えっ？」

急に後ろから話しかけられた私はあわてて後ろを振り返る。

「頭に草生やしちゃって……アクセサリーのつもりか？」

「リョー…」

そこにはかつてこの川原でよくキャッチャーをしていた男の子が一人立っていた。

ブレザーを着ているのをみるとどうやら学校帰りなんだろう。

リョーはそのままざっざっ…と草をかき分けてながら近づいてきて、私の隣に勢いよく座り込んだ。

そして私の頭をワシャワシャとなでてきた。

「わぁ～…わぁ～…やめてよ～リョ～…」

「ちょっと我慢しろって…よしこれで大丈夫だろ」

「…えっ？」

「草が生えてる…って言っただろ。取ってやってたんだよ。」

そういうとリョーは腕を下ろし所在無さげに自分の足の上に運んだ。

鏡を見ないとわからないが…まぁリョーが言うんなら間違いなく取れているだろうし、私はとりあえず自分の指で軽く髪を梳いた。

といっても癖っ毛である髪の毛は真っすぐになってくれるといったことはなく、あくまで整える…といった意味合いでの行動だ。

「リョーは今日何してたの？」

「俺の質問は無視かよ…まぁいいや。俺は後輩に熱心に教えてたら

こんな時間になっちまってな。先輩に説教されてたからこんな時間にな…『お前は後輩に教えるって名目立てて、何練習サボってんだ～！！』ってな…」

「そっか～、もう仮入部期間に入ったんだもんね～。水泳部はいっぱい入りそうなの？」

「それがぜんぜんいなくてな～…だから部活見に来た一人一人に一生懸命教えていたのに…努力って報われないんだな…」

膝を立ててその上で泣きじゃくるリョー。

私でもわかるくらいの嘘泣き声だったので、苦笑いを浮かべて慰めてあげることにした。

「いいこ～いいこ～。リョー君は頑張ったんだね～。」

ガサガサの髪の毛をなでる…少しチクチクしているがあまり気にはならなかった。

「子供扱いすんじゃね～！！」

しかしすぐさま私の腕を振り払って、リョーは頭をあげた。

「ぶぅ～…じゃ～泣きまねなんてやめてよ～…」

知るか！とそっぽを向いてしまったリョー。

なんでかわからないけどすごく焦っていた気がする。

私達はそれからたわいもない話を繰り返した。

さっきまでふけっていた小学校時代のこと、中学校になってからのこと、休日に友達と遊んだこと、今日純一が体育のバレーボールの授業で顔面レシーブをしていたこと…
私たち二人の間にほとんどの沈黙も流れることはなかった。
やっぱり私としてもリョーと話していてすごく楽しいし、なにによりリョーに伝えておきたかったことが次々とわいてきたから。
どっぷりと日が暮れて、街灯があたりを少しばかり照らしてくれるようになっても止まることを知らない。

「それにしてもこんなに夜遅くまでおしゃべりしてたことなんてなかったよね！」

「そうか？誰かの家に泊まった時なんか、親にばれないように部屋中真っ暗にしてから誰かが寝るまでずっと話してたじゃん。たいてい最初に寝るのは梨穂子だったけどさ。次に純一。」

「えぇ～！リョーだって先に寝ちゃったことあるじゃ～ん！…ってそうじゃなくて、こうやって川原で話してることだよ～。」

「あぁ…たしかに昔はこんな時間まで外に出てきたら、うちのオニババか梨穂子か純一の叔母さんが迎えに来てくれてたもんな。」

「そうそう…って叔母さんのことをオニババなんて言っちゃだめだよ！」

「梨穂子が言ったって言わなきゃ大丈夫だよ。だから言わないでくれよな？まじで生命の危機に陥るから。」

「えぇ～どうしようかな～」

手を合わせてお願いしてくるリョーをみるとなんだか意地悪したくなってきた。
せっかくだからいまからはリョーをいじめて楽しもうかな？
最近は棚町さんの影響を受けてか、こうやって純一やリョーを困らせることが少し楽しくなってきた。
もちろん本当に些細なことでしかからかえず、この前『もっと攻めなきゃ面白くないでしょ？』と棚町さんに指導されたんだっけ。
「あぁ～！そんなこと言っちゃいますか！…じゃあ俺も梨穂子の叔母さんに『梨穂子が叔母さんが大好きなシュークリーム勝手に食べた』ってばらすからな！」
それにリョー相手だとこうやってすぐに私の弱みを出されちゃうから、いっつも私が退くことになっちゃう。
でも今日ばかりは少し違う展開になりそうだ。
「ふ～んだ！それは一昨日ばれちゃったからこわくないよ～だ！」
「…それはご愁傷様」
「実はあの後すぐにお母さんに問い詰められちゃって、ぽろっと…ね？」
「そりゃあまぁ梨穂子んちでお菓子好きなの梨穂子と叔母さんだけだろ？伯父さんは甘い物苦手だし。」
「なんでなんだろうね～？あんなに美味しいのに～？」
「…そりゃ近くにスイーツ大食いチャンプとその後継者がいるんだ

…食う気も失せるだろう…」

「えっ？」

「いや…伯父さんドンマイ…って思っただけだから。気にすんな。」

「うっ…うん。」

あれ？なんで慰められてるんだろう？……まぁリョーが言うんだから気にしなくていいことなんだろう。

「それじゃあ今日は迎えも来ないんだし自主的に帰りますか。もうすぐ８時になるぞ？」

左腕に付けた腕時計を私に見せるようにしながら言ってきた。
確かに短針がもうすぐ８に到達しようとしていた。

「本当だ…それじゃ帰ろっか？」

横に置いてあったカバンをつかんでから立ちあがって、カバンとスカートについたほこりをポンポンと落とす。
背中についていたものはリョーが軽く払ってくれた。

「そういえばこうやって帰るのも久しぶりだよね？」

「そうだな。この頃部活や委員会で忙しかったりしたからな～。」

「あれ？リョー委員会も入ってたの？」

「言ってなかったっけ？俺保健委員になったんだけど、微妙に忙し

くてさ、毎日のように放課後少しだけだけど残されてるんだよな。」

「そうなんだ。」

私達は来た道を戻って再び土手沿いの道を歩き始めた。
普段なら帰り道としては使わない一種の裏道……それをたまたま同じ日に使ったのだからなんだか面白い。
さっきもこの話だけで１０分は話していた気がする。

「なんだかリョー急にいろいろ始めたよね～。水泳部だって去年の１０月ぐらいに急に入ったし、委員会だって去年まではめんどくせ～、って言ってやろうともしなかったじゃない。」

「…それは俺の真似か？だったら俺はそんな可愛らしい声で話していたことになるな。」

「リョーの声ってどっちかっていうとカッコいいほうだと思うけど…」

「そんな真顔で答えなくていいわ！」

「あはははは！…それでどうして？」

「あんっ？」

「だからどうしていろいろ始めての？って聞いてるんだよ～！」

今訪ねていて気付いたこと…それはリョーがこの話題を避けていることだ。
今日はリョーを少しいじめてみようと数分前に決意したので、棚町

さんに言われた通り攻めてみよう。
私はごまかしはきかないよ！という意思を見せるために語気を強めて話した。

「それはまぁ…ちょっと暇な時間が多かったから、時間つぶしにというか…まぁそんなとこ。」

「時間つぶし？暇さえあればずっと音楽聴いてるリョーが？」

「1日平均2時間しか聞いてないからな！」

「十分だよ～。多いときで8時間とか聞いてるんでしょ？」

「……まぁたまにな。」

頬を掻き照れくさそうにしている。
目線をはずしているのがその証拠だ。

「いいから早く帰るぞ！」

「あっ！待ってよ～！」

あまりにも恥ずかしくなったからか、リョーは一人先に行ってしまう。
私はあわててその後ろ姿を追った。
…この背中を追いかけるのも久しぶりだな。

こうして横になっているとあの日の夕方を思い出す。
あの後私の家までリョーが送ってくれて、家に着くまでいっぱいおしゃべりして…それでも話し足りなかったから家に電話しちゃって…お母さんに怒られるまで話しこんじゃったんだよね。
今思うと結局いろいろ始めた理由…聞いてなかったな～。
またはぐらかされてたんだな～、と気付いて一つため息を吐いた。
ビューと少し冷たい風が流れた。
ため息は春風に吹かれてどこかへと飛んで行ってくれたのかな？
横には４年前のように黄色い見事な花を咲かせたタンポポがあり、ぴしぴしと顔にぶつかって存在を主張していた。
あの時リョーは何も言ってくれなかったけど…実はなんとなく理由は分かっていたんだよ？
もちろんそれが正解かなんてのは分からなかったけど…たぶん原因なんだろうなぁ…って思っていた。

あの日リョーに純一に対する気持ちを伝えた日…あれ以来リョーと遊ぶ機会が減った。
クラスでも廊下で会えば話もするし、一緒に帰ったりもしたけど…あれからリョーが家に上がることが少なくなった。

そしてリョーが私と純一と3人で遊ぶ約束をしたときにドタキャンすることが多くなった。
リョーが部活を始めてからは一緒に帰ることも少なくなって、話す機会さえ減っていった。
またリョーが遊べなくなったことで純一ともなぜか遊ぶ回数が減るようになった…

きっとあれが原因だったのだ。
それを裏付けるようにそれからリョーのことが分からなくなってきた。
それまでは毎日のようにおしゃべりして遊んでいたからその日の朝ごはんまで知っていたのに、それからというもののリョーが休みの日に何をしたのか、昨日は寝る前に何の曲を聴いていたのか、ましてや今日はどんな楽しいことがあったのかすら…
あの時の私はすぐには気付けなかったけど…2か月もすればこの事実に気付いていた。

『じゃあ俺が手伝ってやるよ！梨穂子と純一が仲良く出来るように！』

この言葉を残して、リョーは少しずつ離れていった。
たしかにあの時私は純一への気持ちを伝えたけど…リョーにだって私にも把握できない思いを持っていたんだよ？
それは純一とは違って…いうならピンク色をしたものではなかったけど…大きく括るなら親友みたいな。
だから少しずつ離れていくのがわかって…ベッドの上で泣いてそのまま寝ちゃった日だってあるんだからね？
…なんだか少し腹が立ってきちゃった。
このイライラをぶつける相手もいない川原のタンポポ群生地。

「う～…ばっきゃろ～！！」

しょうがないので少し大声を出すことでストレスを解消することにした。
遠くで野球をやっていた子供たちを驚かせてしまったかもしれない。
よくよく考えたら私の責任じゃないよ！そうだよ！と大きな独り言を放つ。
本当はリョーに直接言ってやりたい…うん！今度絶対言おう！
当時すごく悲しい思いをしたのだし…なにより大切な『パートナー』なのだから。

むくりと体を起こす。
まだまだ晴れ渡っている空のもと、ゆっくりと大きく深呼吸した。
やっぱりここはすごくおちつくな～！
こうしてたまに体を起こして伸ばさないとすぐに眠くなっちゃう。
腕を伸ばしながら体を左右にひねっていく。
中学のころからだが相変わらず体は硬く、１８０。開くのが精いっぱいだ。
…今日からお風呂入った後ストレッチしよっ！と何度目になるかわからない宣言をする。
自分でも思うのだがあまりにも意志が弱い。

ざっざっ…

そこでふと草をかき分ける音がした。
私はそれに気づいて後ろを振り返る。
４年前のあの日には気付かなかった近づく音に気付いて。
私は一瞥するとそのままいつものように笑顔その人を迎え入れることにした。

「こんなところでなにやってんだ？」

## その６（前書き）

３年生になってからの話です。

時期的にβの２～３話辺りかと。

## その6

「カラオケ？」

今日も長ったらしい呪詛のような授業を受けきりようやく迎えた放課後、久しぶりにバイトも委員会もない俺は偶には…とばかりに教室で談笑を繰り広げていた。

梅原が実家の寿司屋で、間違ってハマチを注文したお客さんにタコを出しただとか、薫がファミレスのバイト先で田中さんと見間違えたお客さんに馴れ馴れしく挨拶しただとか、俺がバイト先でスクール生である子供達にプールに突き落とされ、そのまま２０代前半くらいの女性の胸に突っ込んでしまい気持ちよかったとか…

最近こういった馬鹿話をすることが少なくなってきていたので、話が盛り上がる盛り上がる。

横で話を聞いていた伊藤さんに『3人とも仕事は真面目にした方がいいよ…』と若干顔をひきつらせながら言っていたが、まぁそういったミスが話のタネになってくれてるんでいいんじゃないかな、と俺達3人は素で思っていた。

そうして話を続けること小一時間、さっきまで高かった日が少しずつ落ち始め夕焼けを形成してきた西の空を見て、ふと薫がそんな提案をしてきた。

おそらく話し足りないから、このままどこか遊びに行きたくなってしまったのだろう。

ふっ…まるで子供だな…

「お～っ！いいねいいね！俺の美声を聞け～！」

「私も行きたい行きたい！」

それに続く梅原と伊藤さん。

薫もそうだろうがやはり話し足りないのだろう。

かく言う俺もやはりもう少し話したいなぁ～、ともうすぐお開きになりそうだったこの井戸端会議的なものに名残惜しさを感じていたのでそれはいいのだが…

「でもカラオケって高いんだろ？」

そうなるといつも寒い俺の財布の中身が南極張りの極寒に達してしまう。

「そんなことないわよ。私が知ってるところは2時間で３８０円くらいよ？」

「えっ？カラオケって1曲１００円とかじゃないのか？」

「…巽君っていつの時代の人だっけ？」

「そういや大将とカラオケは言ったことなかったな～。」

梅原や純一とはいろんな遊びをしたもんだが、基本的に（主に俺の）財布にやさしい遊びばかりしていた。

「いや、俺ってカラオケって行ったことないからな～。」

「あんた徹夜で音楽聴くぐらい好きなのに、カラオケ行ったことなかったんだ。」

「だって唄なんて家でもどこでも歌えるだろ？それならわざわざ金払う必要ないじゃん。」

それに大量に歌うとなるとさらに金が…いや、今は時間制なんだっけ。

酔った父さんが何度も話した両親の馴れ初め話ではそんな感じのことを言っていたので、いまだにそうだと思っていたのだが…そういやそれから３０年は経ってるんだっけか。

そういった勘違いもあったが、正直カラオケに行きたいとは思えなかった。

「チッチッチッ…そんなんじゃ真の音楽好きとは言えないわね…」

「本当だな…所詮巽はにわか音楽好きだったんだな…」

「なっ…俺の音楽愛は生半可なもんじゃねぇ！山より高く海より深く、ついでに太陽より熱いこの気持ちをなめんじゃねぇ！」

「それはやたら凄そうね…」

つい大声で叫ぶように啖呵を切ってしまったが、それだけ音楽を愛している自負があるからだ。

「それじゃあ今日は巽君のカラオケデビューだね！」

「おうっ！行ってやんよ！」

「それじゃあさっそく行くわよ！ついてらっしゃい！にわか怜！」

「しゃあ！待ってやがれ、カラオケ…屋？」

あれ？なんかすげ～簡単に行くことが決まったな…まぁいいけど。

「へぇ～カラオケってこんな感じなんだな。」

初カラオケの俺は部屋に入り一息つくと、ようやくそんな一言を吐きだせた。

後ろについて行くだけで、店に入ってからというものの薫に『何時間ぐらいいく？』と聞かれたときに「任せた」ということが精いっぱいだった。

それほど俺にとっては異次元な場所だった。

ゲーセンのようなやかましさがあるわけではないが、ファミレスのようなゆったりした雰囲気があるわけでもない。

イメージとして全体的に暗い雰囲気の店なのかと思っていたが、普通に電気は付いているしミラーボールが燦然と光っているわけでもなかった。

受付を終え部屋の番号が付いたプレートを持った伊藤さんについて行く際、通り過ぎる部屋から微かにだが歌声が聞こえる。

意外とみんな小さい声で歌ってんのかな？

テリトリー外に入ってしまい辺りをびくびくしながら歩いて行く兵士のようにきょろきょろと首を振る歩く姿を梅原、薫にめちゃくちゃ笑われていたが、それにすらまともな反応ができなかった。

部屋に入ると部屋の中心にテーブルが置かれ、その左右に2～3人用のソファーが1つずつ、入り口とは逆側の壁際にテレビとカラオケの機械らしいものが乗ったテレビ台が設置されていた。

薫、伊藤さんが左、俺、梅原が右へとそれぞれ分かれて座る。

ドアを閉め結構狭い部屋に閉じ込められたことで、そこでようやく俺は一息つくことができた。

そして今に至る。

「それじゃあさっそく歌いましょっか？」

「お～っ！伊藤さんが先陣切ったぞ～！」

「伊藤さんってどんな曲歌うの？」

いきなりマイクをつかむわけでもなく四角く辞書くらいの大きさである機械を握りしめている。

梅原はそれを見てやたらテンションを上げ、薫は伊藤さんがいじくっている四角い機械を覗き込んでいる。

…なんだかまったくつかめない。

「なぁ梅原…」

「おっ、どうした？」

「あれ…なにやってんの？」

隣に座りなんかテンションを上げている梅原に、女子二人がきゃっきゃっしながら見ている四角い機械を指さす。

「あぁ…あれはな巽…まずは2人の相性を調べて、カラオケをするに値する関係か機械が測ってるんだ。」

「えっ！？カラオケってそんな敷居高いのかよ！？」

「そうだぜ。1回に2人ずつしか測定できないから、こうやって2人ずつ座れるようにソファーが置いてあるんだぜ。」

ポンポンとソファーをたたきながら、カラオケの機械がハイテクか

つめんどくさいものであると教えてくれた。

「もし…ふさわしくないって出たらどうなるんだ？」

「その時は…このカラオケの機械が勝手に曲を選ばれるんだ…」

「なんだよそれ…まったく知らない曲が出たらどうするんだよ。」

「それならまだいいさ…ＫＢＴ１０８の曲とかが入ってみろ…女の子が歌う分は問題ないが、俺たち男子が歌うとどんな地獄絵図になるかわかるか？」

「それも歌ってもらえば…」

「カラオケはそんな甘くないんだよ…ほらっ、いま伊藤さんが歌うぞ。」

ふとテレビを指す梅原の指を追うと、テレビ画面にはスマックスのヒットシングルのタイトルが浮かび上がった。

「女の子なのに男のを…しかも一人で歌わなきゃなんないんだ。これを守らないとどんどん部屋が暗くなっていって、真っ暗になったら強制的に退室しなきゃなんないんだ。」

「まじか…俺カラオケのことなめてたわ…」

明るくポップスな曲調が部屋中に大音量で響く。

あまりにも大音量だったので俺はつい耳をふさいでしまったが、薫や梅原は全く気にした様子ではない。

カラオケじゃこれは普通なのだろうか…

それにしても…伊藤さんはすごく上手い。

というよりすごいかっこいい。

スマックスの曲を女の子特有の声のやわらかさを保ちながらも、キレやブレスの使い方が上手いからかやたら男らしさを感じた。

「はい、次どうぞ。」

伊藤さんが歌ってる最中、なんか視線を感じてそちらを向くと薫がこちらを向いていて、例の四角い機械を渡してきた。

「おう…梅原、どうすんだ？」

「よし、俺に任せろ。」

こういう時に梅原は頼りになる奴だから、つい任せてしまう。

「まずは…巽、誕生日いつだっけ？」

「えっと…11月23日だな。」

「おっけ。それで…血液型は？」

「A型。」

その後もトントンと画面に質問の答えを打ち込んでいく梅原。

質問の内容も本当に占いを行ってるかのようで、普通に運勢やらなんやらが聞きたくなってしまった。

「あぁ！？…巽…残念だったな。」

「なっ！？どうした、梅原！？」

「俺とお前はカラオケ相性が悪いみたいだ…勝手に曲が選ばれちまった…」

無念だと声を絞り上げる梅原を見やる。

それと同時にテレビ画面に『曲が予約されました』と映し出された。

「巽…頑張れよ。」

なぜか梅原がニヤニヤしている気がしたが、ただ単にテンションが上がりすぎただけかもしれない。

そんなこんなでいろいろと困惑している間に伊藤さんが曲を歌いきったようだ。

周りの二人に合わせて拍手をするも、初めて人前で歌う恥ずかしさが先行してしまい顔が引きつっていただろう。

「さっ、次は大将の番だぜ！みんな拍手～！」

そんな緊張している俺を知ってか知らずか、梅原はやたらと場を盛り上げようとしていた。

とりあえず伊藤さんも立って歌ってたから、俺も立ちあがろう。

「あんたは『ボク』好きだからその辺りでしょ？私も『ボク』は結構聞くからじっくり採点してあげるわよ。」

薫がなんか面白いものを見るかのように、腕組み足組みながらこちらを見上げていた。

「へぇ～巽君って『ボク』好きなんだ～！そういえば桜井からチケット貰ってたもんね！」

そういえばそんなこともあった気がする。

あれはたしか去年の誕生日だったな…

急に出てきた昔話に感慨にふけっていると軽快なエレキギターの音がまたも爆音のように部屋に流れる。

それと同時にテレビ画面にでかでかと映ったタイトルに、薫と伊藤さんは固まってしまった。

『めざせ！〇ケモンマスター！』

「まじかよ…俺運ないんだな～。」

「よっ！がんばれ大将！」

いきなりアニソンのしかもセリフ付き。

最初の曲にしてはハードル高すぎだろ…

「ちょっ…あんた…何してんの？」

「しゃーねぇーだろ。ランダムで決まっちまったんだから…」

「なんで初カラオケでランダムに選んでるのよ…」

「いやなんでも何も…「巽！始まるぞ！」…はぁ～。『たとえ火の中…』」

正直いやいやながらも強制退室だけは避けたいところなので、画面に映る色が変わっていく歌詞に合わせて唄を紡いでいった。

「もっとなりきって歌わないと！ほらセリフもまねて！」

梅原は自分が当らなかったからかめちゃくちゃ楽しそうで、女子二人も梅原が何かを耳打ちした後は大爆笑していた。

…生き地獄だ。

「いやぁ～あんた結構歌うまいのね～！めちゃくちゃかわいかったわよ！」

「笑いながら言うんじゃねぇ！…たくっ、なんで俺だけあんな選曲ばっかなんだ…」

カラオケ屋を出るとすぐさま茶化してきやがった薫。

伊藤さんも同じことを思っていたのか、俺が歌っている最中ずっと顔をにやけさせていた。

「まぁまぁ、今度他の奴とくれば相性が良くて自分の好きな歌が歌えるかもしんないだろ？今日は運が悪かっただけだって！」

「じゃあとりあえず二度とこのメンツじゃ来ないからな。」

まさか2回も『もう一回！』と歌うことになるとは思わなかった…1回でも赤面もんなのに…

というより俺が歌う曲のほとんどがそんな感じの、女の子が歌う分には良いが男が歌うと気持ちが悪い曲、ばかりだった気がする。

わざわざ薫や伊藤さんとも相性調べたのに、まったく傾向が変わんなかったのは本当に痛かった…主に心に。

「了解了解！それじゃあ今度は純一も誘っていこうぜ～！」

「私は恵子誘っとくから～！伊藤さんは桜井さんでも誘ってみたら？」

「桜井か～、でも桜井のことだからバラしちゃうかも…」

「？バラす？何を？」

「いや、なんでもないんだ、大将！さっ、それじゃあ今日はこの辺で解散しようぜ！俺たちはこっちだから！じゃあな～！」

「ちょっ！？梅原！？」

いきなり俺の腕をつかんで引っ張られた。

その勢いにまけるように体が持って行かれ、どんどんと薫たちから離れていく。

ほとんど夕焼け色も空からなくなり闇が広がってきている時間なので2人を送ったりしたほうがいいんじゃないのか？とも思ったがまぁ薫がいるから平気だろう。

俺は街灯が点き始めた小さな路地を梅原に引っ張られドナドナと連れて行かれた。

…そういえばこれも歌ったな。

## その６（後書き）

携帯は持っててても意外と機械音痴な怜君の話でした。

最近本編では暗い話ばかり書いていたため、こんな意味わからん話を書いてみたくなっちゃいました。

ちなみにスマックスはＳＭＡＰ、ボクはＢＵＭＰＯＦＣＨＩＣＫＥＮ（略してＢＯＣ）をもじったアーティストです。

何を隠そう無類のＢＵＭＰ好きなんで（笑）

もちろんこの話の設定が本編とつながるかは未定です。

## その7（前書き）

槇原敬之様の名曲『どうしようもない僕に天使が降りてきた』をパクって書きました。

## その7

「リョーのばかっ！」

凄まじい罵声に続いて勢い良く玄関のドアが閉ざされた。

あまりにも勢い良く閉まったため、ついドアが壊れたりしたのではないか、とぼんやりと心配している俺がいる。

深いため息を吐きながら壁にもたれかかる。

俺の身体の周辺には散らばるようにぬいぐるみや枕。

この光景に、本当に怒ってるんだな～、なんと他人行儀になってしまった。

「…いつ以来だろうな。」

今夜はついに彼女を怒らせてしまった。

付き合い始めて1年の記念日が来月だから…約1年ぶりくらいかな。

最後に怒った姿を見たのはあのクリスマスイブの夜だっただろう。

純一に受けた傷と俺が背負い続けた傷を舐め合うように、あの日俺達はお互いを励まし、癒し合った。

その時でさえ彼女は悲しみに負けて、ストレスを吐き出すように純

一と俺に昔から抱えていた不満をぶちまけただけで、俺一人の場合だと怒らせたのは今日が初めてかもしれない。

幼なじみなのに呆れるほど仲が良かった…ということじゃないんだろうな。

「とりあえず…追っかけないとな。」

依然として頭の中は空っぽ。

身体が動くがままにゆるゆると靴を履き、音をたてないようにそっとドアを閉めた。

理由はいたって単純なものだった。

梨穂子が嫌がることをし続けた。

略せばこんなもんだ。

何度言われてもずっと変えてくれない俺に、とうとう沸点を超えてしまったのだろう。

そして梨穂子は赤い目覚まし時計を抱え、この部屋を出て行った。

俺が梨穂子と付き合う前…七咲からもらった誕生日プレゼント。

実用性の高いものをくれるあたりが七咲らしい、と当時は七咲の頭をぽんぽんと撫でながら思っていた。

その目覚まし時計を1年たった今でも俺は使い続けていた。

登校日、休日、バイトまでの昼寝時…

赤い目覚まし時計は包み込むような電子音で、俺を心地良く眠りから覚ましてくれた。

俺にとってなかなかのお気に入りで、梨穂子には何度も熱弁を振るった。

その度梨穂子は目を輝かせ、自身の寝坊助っぷりを解消できるかと胸を踊らせていた。

それなのに今日はそれが原因で、梨穂子は家から飛び出していった。

正直訳が分からない。

だからといって、ただぼんやりと時間が過ぎるのを待つことはできない。

あの日誓った言葉を胸に、俺は走り出す。

外はどっぷりと闇を帯びていて、空からはしんしんと雪が降っている。

梨穂子が家にきた昼頃からずっと降り続いていた雪は景色を白で覆

い、雲間から差し込む月明かりによってなんだか幻想的な空間にさえ感じられた。

１９時を回り、人気のない街並み。

そんな中から1人の大切な人を探し出さなければいけない。

見つけ出すのが遅くなればなるほど雪が熱を奪っていくだろう。

そうだというのに頭はやけに冷静に働いていて、走ることで温まる身体とは反比例していくように思考していた。

といっても考えることは梨穂子の居場所ではない。

梨穂子の居場所は分かっていた。

道路に落ちていた白い羽根が俺を梨穂子の元へと導いてくれるから。

小刻みな呼吸に白い息がリズムよく吐き出される。

足元が不安定であるが、梨穂子の姿はいまだ見えないのだから走ることをを止めるわけにはいかない。

白い羽根を頼りに俺は走りつづけた。

「やっと見つけた。」

「リョー…」

梨穂子は複雑そうな表情を浮かべ、俺に視線を向ける。

迎えにきたことは嬉しいがまだ許してはいない…といったところだろう。

赤の目覚まし時計は大切そうに抱え込まれている。

やはり梨穂子は丘の上公園にいた。

ここは俺と梨穂子の始まりの場所であり、俺にとっての終わりの場所でもある。

「…どうしてここだって分かったの？」

「雪降ってるからな。梨穂子の足跡を辿ったら見つけられた。」

「…さすがリョーだね。私の足のサイズまで分かっちゃうんだ。」

「いったいどんだけ一緒にいたと思ってるんだよ。」

「１０年くらい…かな？」

目覚まし時計を抱える両腕は肩からガクガクと震え、頭にはうっす

らと雪を積もらせている梨穂子。

寒いであろうにその表情は悲しげな笑みを浮かべ、何かを躊躇っているように見えた。

公園の入口にいる俺からは数メートル先にいる梨穂子のすべてを見抜くことはできない。

「梨穂子…」

「…ごめんね、リョー。」

「謝るのは俺の方だろ。梨穂子が…」

「えいっ！」「…はっ？」

だから梨穂子が急に両手を挙げたのには口を開けざるを得なかった。

勢いよく振り上げられた手の先には赤い目覚まし時計が小さく映る。

雪降る夜を逆らうように高く上がった目覚まし時計はチクタクと音を立てながら宙を舞う。

高く上がりきった目覚まし時計は重力に引かれ、徐々にスピードを上げながら雪原へと落ちていく。

そしてガシャッという鈍い音が夜の公園に響いた。

「…あ～あ、壊れちゃった。」

おもしろくなさそうに鼻をすんと鳴らす。

「目覚まし時計って意外と壊れやすいんだね。ばらばらになっちゃったよ～。」

「梨穂子…」

「片付けが大変になっちゃたよ…。箒とか落ちてないかな…。」

きょろきょろとあたりを見渡すが目当てのものは見つかるはずがない。

夜の公園に都合よく箒が落ちていることなんてそうそうないだろう。

「落ちているわけないよね…。そりゃあそうだよね～。」

あははっと笑顔を見せ無邪気な笑い声をあげる。

昔俺と梨穂子と…純一と遊んでいた時を思い出させる声に少し胸が痛んだ。

「リョー？　なにかいい方法ないかなぁ？　このままじゃ公園の管理人さんに怒られちゃうよ～…」

ゆっくりと梨穂子に近づいていく。

特に気にすることもなく、梨穂子は楽しそうに街を見下ろし始める。

ぼんやりと家の明かりが灯る丘の上公園からの景色はちっぽけな街でさえ荘厳なものに感じた。

痛いくらい冷たいであろう柵を掴み、身を乗り出しながら輝日東の街並みを見下ろしていた梨穂子はもう手の届くところだ。

また一歩近づく。

「私の家も明かりついてるかな～？　…えっ？」

「…ごめんな。」

後ろから腕を回し力強く抱きしめる。

やはり体は冷え切っていて、それだけで俺の心は痛む。

梨穂子は驚きを隠せず、小さく声を漏らした。

「あの日約束したのにな。」

「ちょっ…ちょっと～。痛いよ～、リョー。」

「俺はお人好しだから周りにひっかき回されて、梨穂子に寂しい思いさせるかもしれないけど…」

「…痛いよ。」

「それでも絶対悲しませないようにする、って約束したのにな。」

「……って」

ようやく捕まえた梨穂子はみるみる脱力し、声も掠れるようなもの

となってしまった。
身体に伝わる梨穂子の重みが、自然と抱きしめたままの右手を梨穂子の頭へと動かしていく。
「…泣かせてごめん。」
梨穂子の乾いた笑み、張り付いたような表情。
それでも瞳からは大粒の涙がこぼれていた。
雪に混ざり、地面へと吸い込まれていくように落ちていく。
「こんなことさせてごめん。」
「…ば……かっ。」
その一言で堰はついに決壊してしまった。
雪降る町に梨穂子の泣き声が響き渡る。
くるりと俺の方に振り返り、胸にしがみつくように泣きじゃくる。
涙も鼻水も泣き声も、全て無地のタートルネックのセーターが受け止めていた。
「わた…私、ひっ…ヒドいことしちゃった…」
「だからそれは俺が…」

「でも…ね……嫌だったのっ！　リョーが…逢ちゃんからもらった目覚ましを使ってるのが！　ムカムカしちゃったの！」

ドンドンと胸を力無き拳が叩く。

それなのにとても重く、苦しい衝撃。

「だから私、のワガママでっ！　壊しちゃえって…思って…。でもこれを壊しちゃったらっ！　リョーが絶対悲しむって！」

俺は梨穂子の叫びを胸で聞き続けた。

痛いと言われても自然と抱き寄せる両腕の力は増していく。

「だからっ！　わひゃしはっ！　無かったことにしようと…」

「もういいよ、梨穂子。全部俺が悪い。」

寒い冬空の中、１つになってしまいたいと願うように梨穂子を強く、強く抱き締める。

梨穂子も言葉を紡げなくなったのか、胸に埋もれて話せなくなったのかは分からないが、今はしがみつくのみだ。

雪は少し小降りになってはきてるものの、気温はどんどんと下がり体温を奪っていく。

それから梨穂子も遠慮がちに腕を回し、２人で身体を温めあっていた。

梨穂子が泣き止むまでずっと…何一つ話すことなく。

「リョーって私のこと何でも分かるんだね。」

３０分は抱き合っていただろうか。

梨穂子は開口一番そんなことを口にした。

月もすっかりと雲に覆われ、俺達を照らす灯りは公園の中央にぽつんと立つ電灯だけだ。

「…んっ。」

「私がここに来るのも分かった。私が謝った理由も分かった。私がギュ～ッてしてほしいことも分かった。」

「…まぁな。」

「でも私は分からないよ。リョーのことが分からない。…何をすれば喜んでくれるのか。何をしたら怒らせちゃうのか。…他にも色々。」

何故か悔しそうな表情を浮かべ、指で胸の当たりをつんつん突いてくる。

左腕は俺の腰に巻かれたままだが。

「そりゃまぁ、俺の方が賢いからじゃないか？　この前の期末だって俺の方が良かったし。」

「あっ、あれは偶々だよ～！　累計では私の方が良いんだから～！」

膨れっ面のまま左腕に力を込める。

すでにくっついてしまったのではないか、と勘違いしてしまうほど身体の一部としか思えない暖かみ。

俺は頭の上に積もった雪を払ってやることで、梨穂子の左腕に答える。

「…決めたっ！」

「ん？　どうしたんだよ、急に。」

「明日デートしよっか！」

「勿論ですよ、お姫様…っとな。」

「あ～っ！　簡単にあしらわないでよ～！」

「そんなことしてないしてない…っと。」

梨穂子は不満げだが何となく楽しげな印象だ。

少なくとも先ほどまでの涙を流した笑顔ではない。

そう…他人の俺からは梨穂子のことをたぶん半分くらいしか理解できていない。

梨穂子はやっぱり少し怒ってるのかもしれないし、気にしないようにしているのかもしれない。

精々この程度の予想が関の山だ。

梨穂子の足のサイズも数値としては知っているが、足跡だけで分かるわけがない。

梨穂子がここに来ると理解しながらも、確証があったわけではない。

今回は偶々上手くいっただけ。

上手くいったから左腕が繋がった。

本当に運任せの勝利だった。

俺は梨穂子を理解し合えていると思ってたけど…

どうやらまだ勉強不足らしい。

柔らかな月明かりが再び雲間から差し込む。

「あのさ、梨穂子。」

「ん？　どしたの？」

「来週クリスマスだろ？　明日プレゼントも一緒に買っちゃうか？」

「…んもぅ。リョーはもうちょっとムード作りに気を配った方がいいですよ～だ。」

頬をキュッと抓り不満げな声を上げる。

この表情だけからは正直何も梨穂子のことが分からないが、きっと梨穂子は理解してくれていると思う。

だって梨穂子は俺のことを半分は理解してくれているのだから。

きっと俺がしたいことも分かっているんだろう。

「それじゃあ…帰るか。」

「…うん！」

腰に回していた左腕が離れる。

ぽっかりと大事な何かが抜け落ちたような気持ちになるが、すぐに右腕に巻かれた左腕が何かを埋めた。

…きっとこの何かが足りない半分なんだろう。

何かが満たされた俺は自然と笑顔をこぼす。

本当にどうしようもない俺に舞い降りた天使だよ、梨穂子は…。

## その7（後書き）

まさに名曲レイプ！？

槇原敬之ファンの方すみません…

この話はクリスマスイブの夜に橘純一にデートをすっぽかされた桜井梨穂子と、七咲の告白を断った巽怜が付き合ったｉｆルートの後日談として書かせていただきました。
ｉｆルートは書いたことありませんが（＾＿＾；）

正直梨穂子と怜がくっ付く話も考えていたので、つい書きたくなってしまいました。

久しぶりの更新が外伝で申し訳ありません…

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1882q/

アマガミ　γの雑貨屋

2011年6月20日20時22分発行